

丹波新地域ビジョン検討委員会 学識者部会 記録

1 開催日時 令和3年10月19日(火) 13:30~16:20

2 場所 兵庫県民会館1201号室

3 出席者

角野委員長(部会長)、上甫木委員、清水(夏)委員
光井委員、平櫛委員

事務局

丹波県民局：今井県民局長、柳瀬県民交流室次長、西原班長、竹村
本庁ビジョン課：吉住主幹

4 内容

(1) 開会

(2) 議事

・草案の検討

(3) 閉会

5 議事録

*開会

今井局長

- ・1章ずつ検討したい
- ・出口の話として、骨子案、絵巻物、概要版とパンフレットを作る
- ・全体の基調をどう考えるか

<第I章>はじめに

角野部会長

- ・基調をどうするのか

委員

- ・ターゲットが誰かにより、トーンや構成が変わってくる
- ・みなさんに読んでもらうとなると、論理的な内容に加えて、物語を読んでもらうというストーリーが必要。アドベンチャーか、ハッピーエンドか
- ・アウトプットでこの冊子をよくするのでなく、大事なのはアウトカムで、読んだ人がどう行動するか

角野部会長

- ・それぞれが自分の立場としてやる、鼓舞するような伝え方が必要
- ・人口減などの危機感はいたずらにあおらず、客観的に触れたうえでの世界を描けるかという投げかけにできているか。今までの仕組みが変わることを前提に描くのだろうと思う
- ・人口減を示しているが、その事実が個々のビジョンに反映できていないように見える

委員

- ・危機感をあおった上で、自分たちでこうしていきましょうというようにストーリーがつながっていれば、トーンが暗くなることはない
- ・現状を見据えたうえで、私たちはこうしましょうという論理性は必要

委員

- ・未来志向のビジョンは賛成だが、それをやるためには可能性と危機感の共有が前提として必要
- ・社会状況が変わったことで、そこに新たな可能性も見つけられる。そのような読み取り方をすれば、色々な展開ができるのではないか
- ・戦が終わって、山・川などの資源が残ったと言われるが、そのあたりの捉え方が施策の上で弱い。もともとある資産を食い潰していないか。そのことを検証することも必要
- ・未来志向の可能性の部分だけでいくと、足下がぐらついてきてしまうので、危機意識も考えていくのがよい

委員

- ・今は未来を見据えてバックキャストする考え方に、未来志向のやり方が変わってきている
- ・年配の人が考えるか、若い人が考えるかで変わる。年代によって我が事感が異なる。そこが課題
- ・SDGs は、2030年のゴールを見据えた上でバックキャストしている

委員

- ・今、計画はバックキャストになっている
- ・大学生も最近みんな堅実で、大きな夢を描くことはない。今何をすれば将来どうなるのか、という理由付けを論理的に共有した方が、共感を持ち、自分ごとにしてくれる
- ・アドベンチャーというより、少しトーンを落としてチャレンジくらいがよいのかもしれない

角野部会長

- ・バックキャストに反対はしないが、本当にそのように伝わる内容になっているのか
- ・個別にひとつずつは無理としても、そのことが分かる内容が必要

委員

- ・若い人にどうしてほしいのか、という呼びかけは、非常に難しい
- ・バックキャストは部分的な切り口でしか言えないので、全体でそれをやろうとするとどこかに歪みが出る
- ・その歪みをカバーしていくという視点で、中高年は未来へつないでいく役割、一方で若い世代はどんどん暴れて欲しい、といったようなことになるのではないか
- ・中間層、無関心層を引きずり込む役割分担を。どんなところでもだいたい賛成3割、反対4割、残りは無関心層。その無関心層を賛成につけられれば勝ち

委員

- ・2050年に向けてのビジョンだが、それまでの途中の計画がどこかに書かれているのか。2030年、2040年のイメージが分からない
- ・時点、時点が描かれていると、イメージしやすい

委員

- ・無関心層の人がやらないといけないことを書く。これに参加すると自分が幸せになるというメッセージがあれば

委員

- ・冒険的なことをいうと、第V章が核だと思うが、そこまでが遠いのでトーンダウンしてしまう
- ・第V章を前にもってきて、そのあとに環境の変化を書く方がいいのでは

今井局長

- ・6月の委員会ではそうしていたが、委員からのご意見があった

委員

- ・危機感をあおりすぎると全体がトーンダウンするのではないかという懸念がある

委員

- ・バックキャストは目標がはっきりしていないといけない。個別の政策では有効
- ・全体の目標像というのは、プロセスプランニングやシナリオプランニングでつくるべき。それを具体化するとき、個々の施策の目標設定をやるのがわかりよいのではないか

委員

- ・未来には、てんでばらばらなことが起きて、いびつなことになるので、そこをカバーするバックヤードを準備するのが現実的
- ・今読んだ人がわかりよいというのは重要な要素

今井局長

- ・ビジョンにおいてバックキャストという手法が成り立つか、という部分の検証がまず必要。可能性の追求くらいの書きぶりに抑えるもの一案
- ・ある種、客観的な現実をしっかりと書く。一定の危機感のもとで可能性を見いだしていく

角野部会長

- ・人口が減ることも、技術が革新することも自分にとっては同レベルの変化。その価値観の評価は置いておいてもよい
- ・温暖化も少子化も、とめられない事実として書いておくとよい。悲観的に書かなくてよい

今井局長

- ・アプローチが長いのが問題。第II、III、IV章の扱いをどうするのか

角野部会長

- ・伝えるべき相手によって、構成は変わってもよいと考える

今井局長

- ・本編だと今のような構成で、概要編では2050年の話がまず始めに出てくるといようなことも考えられる

<第Ⅱ章>わたしたちの丹波-風土・文化、ポテンシャル

角野部会長

- ・第Ⅱ章の内容で丹波が伝わると思うか
- ・ここに書いてあることは、おそらくどこの地域でもそれなりにあること。丹波でも見られる部分と、とりわけ丹波固有の特徴である部分とのメリハリがあってもよい
- ・問題は、これを書いたことによって2050年のビジョンにどうつながるか

委員

- ・この章は空間像、社会像、人間像の材料になるものではないか。この3つの像に関わるものだけでよいのではないか
- ・丹波のポテンシャルが高いことを知らない人は、いないのではないか
- ・将来像にないものは、文章ではなく写真などにすればよいのではないか。使えるものを、まずアピールする

委員

- ・気づきの点だが、可能性と合わせて丹波が抱えている課題もこの章にあると、後ろの章とのつながりがしやすいのでは

今井局長

- ・あえてここで課題をあげなかったのは、次の評価検証の部分で課題をあげているため

委員

- ・9ページ以降の課題の内容と、4～5ページのポテンシャルとの記述の細かさの違いにやや違和感を感じた

委員

- ・使い方に応じて、パターンを変えるやり方もあるのでは。今の内容は、教科書そのもの。単に配って一読するのなら全体の量が重すぎる

角野部会長

- ・いくつかの手段を検討している。情報量の多いものを作るのも必要。教科書的にきっちりできているかどうか、確認する必要がある
- ・言葉自体の意味として、豊穰、伝統などはプラスの意味だが、地勢・地質はニュートラル。漢字2文字に意味を与えるなら要検討

委員

- ・この並びは意味があるのか。ランドスケープを専門にしているものからすると違和感がある。地べたから時間の順に入るのがわかりよいと感じた

今井局長

- ・並びに特に意図はないが、ここでのキーは、「気質」がはいっていること
- ・気質、交流はこれから生きてくる。豊穰、伝統は2050年に守るべき価値であることを訴えたい

委員

- ・動画であれば、ここは最初の映像で伝わる
- ・第Ⅱ章で書かれたことが後ろの章でどう守られるべきなのかが、書いてあればよい

委員

- ・プレイヤーの方に議論していただくべきは第VI章で、それ以外は基盤資料のような使い方
- ・今は第VI章だけが事業計画的になっているが、足りない要素も多くある

角野部会長

- ・第II章は丹波への愛が語られているかどうかだと思う

委員

- ・県として、丹波があるから兵庫県はこんなによいところなのだ、という記述があってもよいのでは
- ・丹波の国際的な知名度はどうなのか

委員

- ・丹波が下流域を支えている

<第三章>丹波の森づくりのこれまでとこれから-継承と発展-

1 森づくりの理念、成果

角野部会長

- ・なぜ、森ということばを使ったのか

委員

- ・丹波の森の定義づけが必要だと思う

委員

- ・1-2「丹波の森づくりとレガシー」は、資料編に回してもよいのではないか。伝えたいことにメリハリを
- ・若者は丹波の森づくりのことをほとんど知らないというアンケート結果だったとのことで、若者を引きつけるようなものに

委員

- ・SDGsのアイコンを入れれば目立つ。もし入れられるならば、今の人にも受け入れられやすい。使い方は国連のページに書いてある

2 地域ビジョンの評価検証

委員

- ・後ろの章に出てこない結果は、ビジョン本体の中に課題として書かなくてもよいのでは。資料編で書けばよい

角野部会長

- ・何を根拠に書いているのか、という人はいるので、ちゃんと参照できるように
- ・NPOの活動が増えた、という話も入れる

3 これからの森づくりに向けて

角野部会長

- ・変化に対応した森づくりを組み立てる必要があることを強調しないといけない

委員

- ・キャッチフレーズがp14にしか出てきていないのが気になる。前後の章にもちゃんとつなげてほしい

委員

- ・キャッチフレーズと基本理念をどう捉えるのか

委員

- ・今回の主な話は、「見せ方論」の部分なのではないか。何をどう見せるか、重み付けするのか

今井局長

- ・骨子として、A3 1枚にクリアにまとめる予定

委員

- ・自分には関係ないと思っている人に、自分が得をすと思ってもらえるように

角野部会長

- ・このように丹波の森構想とビジョンを総括しました、という結論だとすれば、キャッチフレーズにしなくてもよい
- ・「丹波の森づくり第2章」の他の言い方はないか

委員

- ・「丹波の森」をキャッチフレーズに入れなくてもよいのではないか

<第IV章>2050年に向けた長期変化-リスクと可能性-

委員

- ・逆都市化は、人によって使い方が異なるので、計画の類いにおいては使わない方がよい
- ・移住者が増えて地域の担い手になっている、くらいの記述でよい

委員

- ・この辺りで、プロボノの話も触れられればよい

委員

- ・1、2、3は外的要因。4つ目に、人の変化を入れられれば

委員

- ・ゴミに関するグラフは、その内容に触れないのであれば資料編でよい

委員

- ・高齢者の問題ではなく、健康寿命の問題であるということも触れられればよい

<第V章>2050年の丹波を描く-望ましい地域の姿-

1 めざすべき将来の姿-基本理念-

委員

- ・p20の下部にある「われわれの願い」を、もっと激しく、あるいは色々なところに書いてもよいのでは
- ・誰に丹波に来てほしいのか

今井局長

- ・地域を経営できる人材。潜在的にはいるのだが、そういう人に来て欲しい

委員

- ・丹波でチャレンジできる人材に来てほしいということも入れてよいのでは。老若男女が活躍できるということも入れる
- ・空間像も、社会経済像も、人間が作り出すもの

委員

- ・生物多様性など、基盤環境の継承ということも入れてもよいのではないか

今井局長

- ・「安全・安心」は、今は人間像のところに入れているが、地域での施策立てとして扱いが難しい
- ・一案として、3つの将来像の下にプラットフォーム的に位置づけることも考えられるが、どうか

委員

- ・SDGs に、安全・安心の考えも入っている。そういう要素を背景の中に落とし込むというような考え方はできないか
- ・SDGs のような、持続可能な社会という大きなテーマにしておいて、その括弧書きの中の1つに「安全・安心」があるようなイメージ

今井局長

- ・基盤、ゴール、手段、をどう表したらよいかという話

委員

- ・「安全・安心」は居心地の良い場や人とのつながりと言う意味でも、基盤としてよいのではないか
- ・その基盤は資源として、ある種達成してきている。

委員

- ・地域としては施策で出しにくいものなので、それは所与のもの、あるいは県や国が整備すべきものとしてしまうということか

委員

- ・加えて、アンケート等でも評価が高い部分なので、あえて取り上げなくてもよいのではないか
- ・p21 の図は、あまり細かく書かなくてもよい

委員

- ・「共創」は、他のところに書いているか。まだ一般化されていることばではないので、定義は p20 で書いておくべき

2 2050 年の地域社会像

○空間像

委員

- ・自立分散型居住圏と言っても、専門家にしか分からない。
- ・イラストが少しでもあるとわかりやすい

委員

- ・「まち」は平仮名で表記されているが、何か意味があるのか
- ・ことばの捉え方が人によって異なる。定義づけをした方がよい

委員

- ・可能性にどんどんチャレンジできる環境がある、新しい暮らしかたとか、新しい空間の使い方を提案し実行する人たちに来てほしい、というメッセージを最後に入れてはどうか

○社会経済像

委員

- ・共有経済は、3年後にはもう古びたものになっているかもしれない
- ・柔軟な働き方、こんな人に来てほしいと書いて締めれば、具体的に示さなくてもよいのでは

委員

- ・積極的に丹波外との関わりを持つことは示してもよいと思う。30年後には大きく変わっていると思う。外部とも仕事をしながらお金だけを動かせるような社会像もうたってほしい
- ・人口減によって「継業」の考え方は必ず必要になってくる。地域課題だとか産業の後継者という部分と、丹波外の関係性の中から新たな担い手を作っていけるようなサポートシステムは必要

委員

- ・農家は、ある時期だけ人手がたくさん必要。その時期だけ、都会の人に副業してもらおうという事業をしているベンチャー企業が静岡県にある。すでに3,000人くらいの登録者があり、関東の人が有給をとって2週間くらい作業に行っている
- ・自分が住んでいる場所で仕事をやるということに加えて、違う地域の仕事もやるという、組み合わせの発想

角野部会長

- ・逆出稼ぎというのが普通になるかもしれない
- ・ちゃんと儲かって、成功できているというのが伝わりにくい部分もあるかと思う
- ・所得が低くても幸せに生きられるという議論に終わってしまうと、なかなか持続しない。地域の活性化にもつながらない

○人間像

角野部会長

- ・家族のことが、なかなかピンとこない。どういう家族構成・形態になっているのか分からない

委員

- ・家族の役割も、シェアするようなものになっているかもしれない。子どもの成長に応じた、父親や母親の役割をサポートする何か、といったサービスが出てくるように思う

委員

- ・人間像は教育論も必要になってくると思うが、地域で子どもたちが離れていくひとつには、クリエイティブな活動や学習ができていないことがある。
- ・仮想コミュニティ、シェアリングエコノミーなどのデジタル技術の出現によって、丹波にいながらも新しいクリエイティブな教育や価値が生み出せる活動ができるようにすべき。それが2050年にあるべき姿

委員

- ・テーマ型のコミュニティ、従来型のコミュニティ、現状で一定の成果がある中で、どういった方向性に持っていくのかがあってもよい

角野部会長

- ・コミュニティの話と教育の話をつないではどうか。小学校区ベースだけでなく、もう少し広域ベースの教育システムで、コミュニティに還元され、子どもたちを育てるといような絡みの話があまり書いていない

委員

- ・クリエイティブな教育や活動の場がないので、子どもたちが外に出て行く。丹波で受け皿になるようなものは必要なのではないか

<第Ⅵ章> 将来像実現に向けたシナリオ・方向性（未）

本格的には未着手のため、次回議論

<第Ⅶ章> 推進の体制・枠組

委員

- ・事務局がどこに置かれるかを書かないと、絵に描いた餅になってしまう

委員

- ・関係人口案内所の事務局をしているが、30～40代も多い。連携することはできそう

委員

- ・具体的なイメージ例があるなら、団体名を入れるなど推進体制のイメージ図をつくれば、ちゃんと担い手がいるということを現実的に考えられる

角野部会長

- ・次の世代に伝えていくとか、持続性というところが見えているとよい

委員

- ・ユースチームについて、具体的に誰がするかを書いてもよいのでは

委員

- ・中高に働きかけ、卒業後も関わられるようにする。そのような体制づくりについても書く

委員

- ・最近、高校生がオープンな場で自分のやりたいことをプレゼンし、その審査を実際の現場の人がするという取り組みや場作りをやっている事例がけっこうある。
- ・審査員には企業も関わることもあり、これからの将来の担い手を見つけるという側面もある。中高生に、企業や地域の産業も関わるといような仕組みもある。

委員

- ・前半のところの整理について、たくさん出し過ぎると、本当に言いたいことがぼやける
- ・基本理念のところ共創を説明するのであれば、共感、共進化の扱いはどうするのか

委員

- ・共創を説明するときに、これまでのプロセスとして共感、共進化の説明もすればよいのでは

* シンボルプロジェクト

今井局長

- ・現時点で描いているプロジェクトを別紙により説明（必ずしもこの通りに予算がつくわけではない）
- ・この場にご出席の皆様にも関わっていただきながら、来年度の推進体制を築きあげていきたい

* 閉会

角野部会長

- ・一定の方向性が共有できた部分もあれば、事務局で整理を、という部分もあるので、再考し、またご提案をいただければ
- ・理念の部分などは言葉が色々出てくるので、今一度の整理を
- ・論理的にきっちり作る素案の部分と、誰に発信するのかを考えた発信媒体の部分については、メリハリをつけて考えること。単に素案を短くしたものが概要版ということにはおそらくならないと思うので、使い方を意識してやっていただきたい